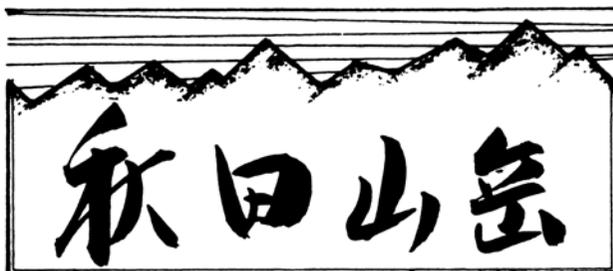


2025



J・A・C



令和7年8月 発行

No. 134

社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市外旭川八幡田
2-1-9 小松方

TEL・018-868-5445

発行者 佐藤和志

編集者 高橋雄悦

● ● ● 春のゆっくり山行 ● ● ●



二度の延期を経て六月二十九日（日）に実施した。秋田市から九名、由利本荘市東由利から一名の計十名が参加し「鳥居の沢登山口」に集合した。鎌田副支部長のあいさつ、案内役によるコースの説明の後、午前九時四十五分に出発した。今にも雨が降り出しそうな雲行

新緑の八塩山(7133)

三浦昭男

きの下、登山道に入る。いつしか道は霧の中、風も涼しく心地よし、足取りも軽やかになった。

最初の分岐で休憩し「鳥居長根コース」に入る。階段のような厳しい急坂続き、ひたすら登ること一時間で稜線に出る。いつの間にか天気も回復し下界も見えるように。一息ついて山頂三角点に寄り、山小屋「八塩山荘」にて昼食休憩する。

下山は雲間に鳥海山を見ながら「風びらコース」を進む、迂回路の「ブナ巨大こぶ」の急坂を慎重に下る。

途中「風びら清水」でひと休みし、鳥居長根コースとの分岐を経由し、鳥居の沢登山口に午後二時五分、全員無事に到着した。下山後「ボツメキ湧水」立ち寄り解散した。

行動時間は四時間十九分（登り、下りいずれも一時間四十分）、歩行距離四・四キロメートル。
「コースメモ」コース整備、草刈、倒木処理ともほぼ良好だった。



風びらコースの一部（標高四百六十メートル）で崩れかけている箇所があった。山頂の八塩神社は積雪のためか全壊していた。なお、深山林道登山口への林道は土砂崩れにより通行止めとなっていた。

参加者 鎌田倫夫 佐藤 博
三浦昭男 小松芳美
会員外六名



八月十一日付秋田魁新報1面
「山の日」題字下広告



北海道・東北地区集会に向け
寒風山を下見登山
高橋雄悦

開催まで一年を切った第三十九回東北・北海道地区集会in秋田の準備の一環として、懇親登山コースとして予定している寒風山の現地の状況を確認するための下見登山を七月二十七日行つた。会員外を含めて十二人が参加した。コースの中にはやぶ化が進んで歩くのに難渋する箇所が見受けられた。今回の結果を踏まえて今後、

行政等に協力を要請する事項をまとめていきたい。

午前九時四十八分、妻恋峠駐車場をスタート。姫ヶ岳頂上を経て蛇越長根分岐までは刈り払いも行き届き快適なものだった。

しかしここから鬼の隠れ里に続く登山道は場所によって人の背丈ほどのやぶの連続であった。

特に蛇越長根北登山口に降りる直前はかなり急坂が続ぎ、大きな段差が複数箇所あるが、足元はまったく見えなかった。一歩間違えば転落して大けがにつながる危険がある。

昼食は鬼の隠れ里でとつたが、ここは日差しを遮るものが何もなく、直射日光をもろに受けながらの休憩となった。この日は絶え間なくさわやかな風が通り抜けてあまり暑さを感じなかったが、来年の大会では休憩用テントなどの設置も検討する必要がある。

昼食後に板場の台に向けて出発しようとしたが、登山道の入口があるはずの場所がやぶに覆われて全く見分けが付かなかつた。ここも道迷い防止のために刈り払いや案内板設置などの対応が必要になると感じた。必要に応じて誘導員の配置も検討したい。

板場の台を過ぎると県道を横断して寒風山登山口に向かうが、大会当日はこの横断箇所にも誘導員

蛇越長根北登山口を下りる直前は激ヤブの連続



を置くなどの対応をしないと、登山口を見過ごして県道を直進する人がいるかもしれない。

当初、寒風山は低山すぎて、県外からの参加者には物足りないのでは、と思っていたが、今回しばらくぶりで歩いてみて、あらためて多彩な魅力があることに気付かされた。登り始めからすぐ眼下に広がる三六〇度の大パノラマ、山肌のあちこちに咲き誇る大輪のヤマユリ。何よりも二つの火口による複雑な起伏が織りなす雄大な光景、加えて岩場や湧水などがコンパクトにまとまっているのは、他にはない大きな魅力だ。

集会がこうした男鹿半島の魅力をあらためて県内外に発信するきっかけづくりとなるよう、本番までの間に地道な工夫を積み重ねていきたい。

参加者 今野昌雄 鈴木裕子
鎌田倫夫 佐藤英實

東北・北海道地区集会
男鹿市に協力依頼

小松芳美

第三十九回東北・北海道地区集会で、山行コースとして予定している寒風山登山道の整備を要請するため、八月六日に佐藤和志支部長とともに所在地である男鹿市を訪れた。

七月二十七日の下見山行の結果を踏まえての対応。姫ヶ岳から先の登山道のやぶ化が激しく、安全な歩行に支障があることを確認したため、男鹿市に対処を要請することとした。

訪問先は男鹿市長、男鹿市観光協会事務局長、男鹿警察署地域課長等で、要請のポイントは下刈りの実施である。

応対した市の文化スポーツ課長は、「他課との調整もあり、検討させてほしい。ジオパークガイドの要請と、参加者の宿泊に男鹿の宿を推薦してほしい」など、逆に要請された事項もあった。

菅原広二市長からも同種の要望を受けた。開催に向け、今後もクリアしなければならぬ課題が山積していることを実感させられた。

三浦昭男 柳田勇悦
小松芳美 高橋雄悦
会員外 柳田ルイ子ほか三名

追悼 堀井弘さんを偲ぶ 福田光子

堀井 弘 氏

昭和十一年七月一日 生
平成六年日本山岳会入会
No. 一一七八五

平成十九年〜二十五年 委員
平成十七年〜十八年 監事
平成二十六年〜令和元年

副支部長
令和二年〜令和六年 顧問
元秋田支部自然保護委員

令和七年一月三十一日逝去
(享年八十九歳)

堀井さんのご逝去を支部の一斉メールで知りました。
令和六年十一月に開かれた日本山岳会秋田支部の六十五周年記念祝賀会では、久しぶりに堀井さんにもお会い出来るとばかり思っておりましたが、おいでになりませんでした。諸般の事情で年内に息子息のいらつしやる仙台に転居するようだとの情報に、ご高齢であれば致し方ないこととその時は納得しました。
いつも元気で、所属するアキ

タ・アルパイン・クラブの集まりや山行にも熱心に参加しておられましたので一月三十一日に亡くなったとの知らせは突然でもとて驚きました。

堀井さんはアキタ・アルパイン・クラブの昭和三十年代からの会員で、山もスキーも熱心でしたが、昭和のあの頃はお仕事も多忙



を極め、山岳会の活動からは少し遠ざかっていたようです。明るく優しいお人柄で職場でも同僚から慕われ、冬は得意のスキーを満喫しておられました。

お忙しい第一線を退いてからは山岳会の活動に復帰し、平成六年に日本山岳会に入会、会員番号は一一七八五番です。会山行や行事にも参加して下さり、山行では愛妻弁当で美味しそうに乾杯を楽しむ姿が印象的でした。

特に植物には詳しく、自然観察会にも熱心に参加、秋田市太平山自然学習センター(通称まんたらめ)主催の小学五年生前岳登山会のリーダーで、それはライフワークでもありました。特に子供達からのお礼状は、宝物としてとても大切にしておられました。

太平山三吉神社の協力会の行事にも熱心に楽しみながら参加していた姿が思い出されます。

太平山登山コースの旭又ルートには丁寧な励ましの標識も作るなど、安全登山にも心配りをして下さいました。

堀井さん、今年の冬は秋田らしい雪が積もりましたよ。太平山スキー場も程々にぎわいましたよ。仙台からは少し遠いですが、たくさんさんの足跡を残した太平山に、駒ヶ岳に、鳥海山に、千の風になっておいで下さい。



秋田支部設立50周年記念に手作りの標柱を作成

生涯現役、笑顔で仲間を大切に
して頂きありがとうございます。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
(合掌)

中央地区山岳協議会総会
小松 芳美

中央地区山岳協議会(佐々木民秀会長)の総会が六月七日、大平山三吉神社齋館で開かれ、令和六年度事業報告、収支決算報告及び監査報告、令和七年度事業計画案及び収支予算案などを、いずれも原案通り承認した。

豪雨で甚大な被害を受けた仁別林道の復旧状況に関する情報交換では、仁別森林博物館までは通行できるようにしたが、舗装やその他の工事があるため引き続き通行止めとなっているとした。旭又登山口までの区間の復旧工事は今年度と来年度に実施する予定。

登山道の倒木処理や刈り払い等については、各団体に自主的に実施していただいた上で、施行前後の写真を添付して事務局(石塚会計)に報告していただきたい、と要請があった。

出席者 小松芳美
太平山警備員会 佐々木民秀
佐藤 博



第三十八回
東北・北海道地区集会
in 洞爺湖参加報告
小松芳美

七月十一日〜十二日、北海道洞爺湖で北海道支部担当の東北・北海道地区集会在洞爺湖観光ホテルへと向かった。

七月十日、鎌田副支部長の車両で八戸からフェリーで苫小牧に上陸し、会場である洞爺湖観光ホテルへと向かった。

開催地は洞爺湖温泉のリゾート地で、近くに昭和新山、有珠山な

どの景勝地が位置し、海外からの観光客が多く訪れていた。

十一日午後一時十分から開かれた支部長会議には佐藤支部長と当方が出席。来年の担当は秋田支部で、再来年は岩手支部での開催が決定した。

今回の集会は、北海道支部創立六十周年記念も兼ねて行われ、本会の飯田副会長、黒川北海道支部長らのあいさつに続き、記念講演では洞爺湖有珠山マイスターネットワーク事務局長・川南恵美子氏が、「有珠山とともに生きる、火山との共生が教えてくれたこと」と題し約八十分間講演。聴衆を飽きさせない構成で、防災と地域振興にも及ぶ熱き内容だった。

懇親会は清水事務局長の流暢な司会で歓談が弾み、当方が来年の秋田集会の概要を説明した。中締めは鎌田副支部長が行った。

十二日、秋田支部の四名は、有珠山火口原（一九七七年の噴火現場）コースに参加。この場所は立ち入り禁止区域であり、資格のある火山マイスターが同行し、ヘルメットを着用し藪こぎでたどり着けるもので、有意義で記憶にも残るものとなった。佐藤支部長は体調不良で一足先に新幹線で帰県。残る参加者も十三日に八戸経由で無事帰県した。

来年の秋田集会に向けて、当方



懇親山行の有珠山火口原コースで

が感じたことを列挙したい。

- ・北海道支部は、全てのイベント規模が大きく準備も緻密だったが、秋田支部では力量に合ったコンパクトなものとした。
- ・講演者の選定と打ち合わせを早めに行うことが大切。
- ・山行及びハイキングコースなどの調査と選定、班長や配置員の検討。

・北海道では外部の火山マイスターが案内したが、秋田では依頼すべきか検討が必要。

・細々とした事務作業などの担当者を選定しておくべき。

こうした点が必要となると痛感した。支部員の「一人一役」全員参加で頑張りたい。

参加者 佐藤和志 鎌田倫夫

今野昌雄 佐藤 博
小松芳美

編集 後記

寒風山の回転展望台近くに「世界三景寒風山」と彫り込んだ真新しい石碑がある。残り二つほど何かというと、実は確かな記録がない。地元では、大正二年に寒風山に登った地理学者志賀重昂が同行者に米グラント・キャニオン、ノルウエー・フィヨルドに並ぶ絶景だと話したという言い伝えがある（異説も）が、志賀の著書には記述がなく真相はやぶの中。やぶと言えば、先日、来年の地区集会上に備えて下見登山を行った寒風山の登山道も一部が文字通りやぶの中。歩く人がいなくなったのだろうか。志賀が「風光の跌宕（てつとう）起伏に富むこと）なる東北地方に冠絶す」と絶賛した光景は、実は人の手が入ることで保たれてきた自然でもある。寒風山に限らず、最近では各地の里山で登山道がやぶ化しているという話を聞く。登山道は先人が遺してくれた貴重な遺産だ。しっかりと後世に引き継ぐことも山岳会の責務でもあろう。

【訂正】会報第百三十三号編集後記で「本来は昨年十一月ごろ発行予定だった」とあるのは「本来は今年二月ごろ発行予定だった」の誤りでした。（高橋雄悦）